

ワークショップ報告

「南アジアのイスラム知識層による社会宗教改革とその展開 －教育活動と広域的ネットワークに着目して」

日時：2019年1月26日（土） 13:30~17:30

会場：上智大学 四谷キャンパス 10号館301教室

報告者

「現代パキスタンの学校教育における近代化運動とイスラム知識人」

須永恵美子（日本学術振興会特別研究員 RPD（東京外国語大学））

「英領パンジャブにおけるイスラム中間層と近代女子教育：イスラーム擁護協会を事例として」

水澤純人（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 特任研究員）

「アフガニスタンにおけるインド・イスラム知識人の活動と人的交流」

登利谷正人（上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科 特別研究員）

「20世紀前半における南アジアのウラマーのハラマインにおける学者ネットワーク」

松田和憲（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科一貫制博士課程・日本学術振興会特別研究員（DC1））

コメンテーター

山根聡（大阪大学大学院言語文化研究科 教授）

ワークショップ全体の概要

本ワークショップでは、19世紀以降に活発化した南アジアのイスラム知識人によるウルドゥー語を媒介とした社会宗教改革に向けた様々な知的活動の展開に着目した。具体的には、南アジアのイスラム知識層による知的活動について、インド北西部（パンジャブ地方）とアフガニスタン、そしてアラビア半島を事例に検証を行うとともに、パキスタンの教科書における英領期の時代認識も検討した。以上を通じて、国家による歴史観を相対化するとともに、南アジア・イスラムに関する地域研究の課題を提起すること目的とした。

まず須永報告においては、現在のパキスタンの教科書記述を分析し、南アジア

のムスリムたちによる社会改革運動がどのように捉えられているのかについて、教科書中で取り上げられる人物や語りの様子を含めて具体的に明らかにした。教科書記述からは近年におけるパキスタン政府の教育政策方針の転換が反映されている点なども確認され、歴史的事項に関する認識が変容していることについて意見が交わされた。

水澤報告においては 19 世紀後半にムスリム女子教育を推進したイスラーム擁護協会の活動について、同協会の発行していたウルドゥー語機関誌の分析を通じて報告が行われた。冒頭でイスラーム擁護協会が元々はキリスト教宣教師による女子教育へ「脅威」に対抗する形で教育活動を展開した点が述べられた。報告全体を通じて、擁護協会による女子教育が当時の社会状況に応じる形で展開した妥協的な内容であった点、女性の生活空間を家内に定めつつそれを宗教的に正当化することを図った点、さらには新たな宗教的教養を備えた主婦育成を女子教育の主目的としていた点が明らかにされた。

登利谷報告では、20 世紀初頭にアフガニスタンの首都カーブルで同国の様々な状況を直接目撃したインド・ムスリム知識人 2 名のウルドゥー語記録を分析することで、当時のアフガニスタン内政や政府内の人的関係、さらには教育改革についての実態を明らかにしようとして試みられた。インド・ムスリム側の記述からは、当時のアフガニスタンにおける教育施設において、様々な問題が生じていたことが確認されるとともに、インド・ムスリム知識人たちがアフガニスタン政府の首脳陣たちと密接な関係を構築し、様々な社会政策に影響を及ぼしていた点も明らかとなった。

松田報告においては、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけての時期にマッカ・マディーナというイスラームの両聖都・ハラマインにおける南アジアのウラマー、特にバレールヴィー派ウラマーによるネットワークに着目し、その具体的な人的交流や関係性について報告を実施した。分析においてはアフマド・リザー・ハーンの『ハラマインの剣』を用いられ、具体的なウラマーの人名と経歴についての調査結果を明らかにした。

以上の各報告を受けて、コメンテーターからは各自の報告に対してコメントや質問が出され、各自の研究の価値が明示されるとともに、今後の研究進展に向けた具体的アドバイスがなされた。さらにフロアからの質疑応答においても、各報告内容に関する具体的な質問やコメントが多数提示され、質の高い討論を行うことができた。

本ワークショップは、イスラーム世界と南アジアの両面において周縁部と位置付けられることの多いパキスタンをフィールドとする若手研究者たちが一堂に会して行われた。通常の学会や研究会においては、共通の基礎的知見に基づく研究発表や討論を行う機会が極めて乏しい状況であるが、本ワークショップではより中身の濃い報告や討論を実施することができた。今回の機会は、今後の共同研究実施や研究交流を深める上で、非常に有益な場となった。